昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要　Vol. 27　31～41（2018）

〈論文〉

大学生を対象とした日常生活にみられる他者操作の把握の試み
── 共起ネットワーク分析を用いた仮説の生成 ──

木川　智美，今城　周造

An Attempt to Comprehend the Manipulation of Others in Daily Life as Seen in University Students: The Generation of a Hypothesis Using Co-occurrence Network Analysis

Satomi KIKAWA, Shuzo IMAJO

This study aimed to comprehend the strategies of manipulating others as a kind of interpersonal communication in daily life as seen in university students. The results of co-occurrence network analysis revealed the presence of manipulating strategies commonly used, independent of the relationships between the manipulator and the target of manipulation (superior, contemporary, or inferior), and the manipulation strategies used for specific relationships. In addition, it was suggested that such tendencies were more remarkable in requesting strategies compared to refusing strategies.

問題

1. 日常生活にみられる他者の操作

他者に自分の意図した行為をとらせようとすることは，傲慢なことと一般には捉えられることが多いが，実際には日常生活にありふれている。例えば，他者に何らかの頼み事をする場合や，教育場面において指導者側が指導を行うという社会的に望ましいとされる行為もまた他者に自分の意図した行為をとらせようとするものであると捉えることもできる。このように他者を操作しようとする行為を捉えると，それは対人コミュニケーションにおいて不可欠な要素として位置づけることができるだろう。本研究はこのような，日常的にみられる対人コミュニケーションの範囲内における他者の操作に焦点をあてる。

2. 心理学における他者の操作

寺島（2013）も指摘するように，他者を操作しようとすることの理解には心理学が果たす役割が少なくないと考えられる。心理学においては，他者を操作しようとする行為は，いくつかの側面から研究されてきた。それには，ドメスティック・ヴァイオレンス（DV）や子どもおよび高齢者への虐待，詐欺，悪徳商法，マインド・コントロール（Mind control）など，他者に対する操作や操作しようとする動機が引き起こす社会的問題の理解

と支援のための個別の研究（e.g., 西田，2001），マキャベリアニズム（Christie & Geis, 1970），パーソナリティ障害における操作性に代表される不適応的な対人コミュニケーションをとるパーソナリティの研究（Gunderson, 1984），そして，社会心理学を中心に古くから研究されてきた説得に関する一連の研究（e.g., 深田，2002）や，近年みられるようになってきた他者操作方略とよばれる対人コミュニケーションにおける操作技法の研究がある（e.g., 寺島・小玉，2004）。以上の研究については，木川（2016）のレビューがある。このうち，日常生活における対人コミュケーションの一種としての操作を扱っていると考えることのできる研究は，社会心理学における説得に関する研究と他者操作方略に関する研究である。

まず説得は，明確な意図に基づき他者の態度を変容させる行為として捉えられることが多い。しかし，本研究が焦点をあてる日常生活における対人コミュニケーションにおける操作は，必ずしも他者の態度を変容させることを目的とするものではないだろう。前述したように，操作的なコミュニケーションは日常にありふれており，多くは自らの目的とする行為を操作対象者にさせることができれば操作者は満足し，その態度までの操作はもとめない場合が多いといえる。さらに日常性の観点からも，説得を行うシチュエーションは多くの人の場合，それほど頻度が高くないといえるだろう。この２点において説得に関する一連の研究は，本研究が対象とする操作とは，連続線上にはあるが，やや異なる行為として位置づけられるだろう。

それに対して，他者操作方略とよばれる研究領域は，本研究が焦点をあてる日常的な対人コミュニケーションにおける操作にもっとも近い。例えば，寺島・小玉の一連の研究（2004, 2006, 2007a, 2007b, 2008）においては，一般大学生を対象に調査を行い，その結果から，卑下的―高圧的，行動的―感情的の２軸４象限の独自のモデルを生成し，他者操作の方略（strategy）を分類している。寺島・小玉（2004）によれば，他者操作方略は，“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする方略”と“他者からのケアを引き出そうとする方略”という２つの側面に集約されると定義しており，その両側面を測定する尺度を作成している。尺度の作成においては事前に行動的―感情的，優越的―卑下的という２軸４象限のモデルを構築し，それをもとに４因子構造（計21項目）の他者操作方略尺度を作成している。その因子構造は４象限のモデルを支持し，第１因子は，“「すごいね」と言ってもらおうとして自分のすごいと思うところをアピールする”などからなる「自己優越的感情操作」，第２因子は，“相手になぐさめてもらおうとして自分の不運を大げさにぼやく”などからなる「自己卑下的感情操作」，第３因子は，“頼みごとをことわりにくくさせようとして相手への昔の貸しをもちだす”などからなる「自己優越的行動操作」，第４因子は“自分の仕事を手伝ってもらおうとしていかにも困っているふりをする”などからなる「自己卑下的行動操作」から構成されている。寺島・小玉（2004）はこの尺度を用いて，自尊心，自己愛，対人葛藤，対人磨耗，対人劣等，心身の健康などと他者操作方略との関連を検討している。

また，Buss, Gomes, Higgins, & Lauterbach（1987）およびBuss（1992）は，親密な人間関係（恋愛関係）に限定し他者操作の技法（tactics）を類型化している。Buss et al.（1987）においては，愛想，無視，強制，理由の説明，退行，自己卑下という他者操作技法が特定された。さらに，Buss（1992）においては，上記に，責任感の喚起，互恵的報酬，金銭的報酬，喜びの喚起，社会的比較，強弁な態度が追加されている。そして，こうした他者操作技法とパーソナリティのBig Five（Goldberg, 1990）. との関連性が検討されてい

る。

3. 先行研究における課題—操作の適応性と操作対象者との親密性・地位関係—

上述してきたとおり，他者操作の心理学的研究は，寺島・小玉の一連の研究（2004, 2006, 2007a, 2007b, 2008）やBuss（1992）およびBuss et al.（1987）のものがあるが，寺島・小玉（e.g., 2004）では，モデルの生成にあたりマキャベリアニズムやパーソナリティ障害における操作の特徴から着想を得ており，対人関係における不適応的な操作が念頭に置かれている。したがって，本研究が焦点をあてる個人が日常的に用いる対人コミュニケーションとしての操作の全体像を捉えきれていない可能性が充分にある。

また，Buss（1992）およびBuss et al.（1987）の研究は，恋人という極めて親密な人間関係に焦点を当てているため，寺島・小玉（e.g., 2004）の研究と同じく，個人が日常的に用いる対人コミュニケーションとしての操作の全体像を理解可能にするものではない。日常生活においては，親密な人間関係はその一部に過ぎないからである。加えて，自分より目上の人物もしくはその逆の人物との関わりもあり，そこでもまた，操作的なコミュニケーションが取られていることは事実であろう。

このように寺島・小玉（e.g., 2004）やBuss（1992）およびBuss et al.（1987）の研究では，操作の適応性，操作する側（操作者）と操作される側（操作対象者）における親密性と地位関係に関して，個人が日常的に用いる操作を狭くとらえていると言わざるを得ない。

4. 本研究における他者操作の定義

そこで本研究では，他者を操作すること，すなわち他者操作を，日常生活における対人コミュニケーションのなかで，他者に自らの意図の通りになにかをさせようと試みたり，自らの意図のとおりに何かをさせないように試みる行為と定義する。なお便宜的に，前者を依頼的操作，後者を拒否的操作と呼ぶ。ちなみに，日常生活における対人コミュニケーションとは，健常な個人が社会において適応的と判断される範囲で頻繁に用いられるコミュニケーションを指すものとする。

本研究では，比較的自由度の高い生活を送り，様々な形式でのコミュニケーションを自らと立場が異なる相手も含めた不特定多数ととる者が多いと考えられる健常な大学生を対象に，日常生活における対人コミュニケーションの一形態としての他者操作の全体像を把握することを目指す。その際，操作者と操作対象者との地位関係については，操作者からみて，目上，同年輩，目下という分類を用いる。

本研究は，操作対象者の親密性を限定せず，操作者との地位関係をも考慮し，日常生活でみられる適応的なものも含む他者操作の全体像を把握しようとする点で，独自であり，対人コミュニケーションへの理解の一助となることが期待される。

5. 目的

本研究では大学生を対象に日常生活でみられる適応的なものも含む，他者操作を広く把握することを目的とし，自由記述形式による調査を実施する。その際，同年輩の他者との関係のみではなく，目上や目下の他者との間にみられる操作も把握するよう試みる。

方法

調査協力者　関東圏内の大学生176名を対象とした（男女の内訳としては，男性は33名，女性は143名であった）。

手続き　2016年12月から2017年1月にかけて，授業時間内に質問紙を配布した。

質問紙　対象別（目上，同年輩，目下）に自らが

用いている依頼的・拒否的操作方略を自由記述形式にて，回答をもとめた。教示文は「あなたは目上・年上の誰かに何かをしてほしい，もしくは，こう思ってほしいと考える際にどのような手段を用いますか？　以下に自由にご記入ください。」および「あなたは目上・年上の誰かに何かをしてほしくない，もしくは，こう思ってほしくないと考える際にどのような手段を用いますか？　以下に自由にご記入ください。」とし，同年輩，目下に対しても，同様に回答をもとめた。回答欄は各々最大3個の回答が可能であるよう罫線で示した。

倫理的配慮　所属機関において審査を受けた（昭和女子大学倫理審査委員会　承認番号 16-43）。

分析方法　分析にはKH Coder（Ver. 2.00f）を用いた。

結果

日常生活にみられる他者操作は操作者と操作対象者の関係性により異なることが想定されるので，本研究においては操作者からみて，目上，同年輩，目下別に分析を試みた。

本研究は自由記述形式の回答を分析するものであるが，そのような際に一般的に用いられる方法にはKJ法（川喜田，1967）が知られている。しかし，KJ法はその正式な手続きを遵守することが困難である場合が多く，結果としてその分類には，研究者の主観的な判断が混入しやすいことが課題として知られている。本研究では，自由記述形式の回答などの質的なデータについて，その回答に使用される語の頻度とその共起関係（ひとつの回答内に同時に使用される語と語の関係）という数量的な側面から分析を試みる共起ネットワーク分析（樋口，2014）を使用する。上述したKH Coder（Ver. 2.00f）はこの分析を行なうソフトウェアである。共起ネットワーク分析は近年，社会心理学などの分野において多用される言語データに対する量的な分析手法の一種である（嘉瀬・坂内・大石，2016）。

得られた自由記述回答は依頼的操作方略，拒否的操作方略ともに計176個であった（複数の回答を記述した調査協力者もいるが，語の共起関係を分析するため，1つの回答とみなした）。共起ネットワーク分析を実施するために，助詞や接続詞を除き出現頻度が6以上の語をTable 1に示す。

大学生による目上に対する操作

依頼的方略および拒否的方略の回答について，出現頻度が6以上の語を対象に，共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークをFigure 1および2に示す。Figure 1および2は，線で結ばれているそれぞれの語（node）の間に共起関係があることを示す。また，頻出度が高い語ほどnodeが大きく表示されるように設定した。さらに，共起関係の多い語の間の線は太く表示されるように設定した。なお，破線は，以下に示す他の共起ネットワーク分析の結果と比較し，本結果において特徴的である箇所を囲んだものである。

依頼的方略（Figure 1）において，頻出度の高い語に「お願い」「伝える」「言う」がみられた。もっとも頻出度の高い「伝える」は「お願い」「言う」双方と共起関係にあった。また，それ以外に「伝える」と共起関係にある語は，「話す」「理由」「行動」「相手」「自分」「下手」「丁寧」であった。さらに，特徴的にみられる共起関係として「下手―出る」「売る―媚びる」が挙げられる。

拒否的方略（Figure 2）では頻出度が高い語として，「断る」「伝える」「申し訳」がみられた。三者はそれぞれ共起関係にあり，もっとも頻出度が高かった「断る」と共起関係にある上記以外の語は，「嫌」「思う」「話す」「相手」「理由」「出す」「言う」であった。特徴的にみられる共起関係としては「断る―申し訳」が挙げられる。

大学生による同年輩に対する操作

同年輩への操作について同様に，共起ネットワ

Table 1　大学生による操作対象者の地位別の依頼的方略および拒否的方略に用いられる頻出語

目上				同年輩				目下			
依頼的		拒否的		依頼的		拒否的		依頼的		拒否的	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
伝える	50	断る	54	言う	40	伝える	80	伝える	64	言う	67
お願い	41	伝える	42	伝える	33	言う	74	言う	40	伝える	66
言う	28	申し訳	41	話	29	理由	27	頼む	31	理由	30
頼む	22	言う	34	人	24	思う	22	お願い	28	思う	19
アピール	15	理由	19	自分	23	自分	20	思う	23	直接	16
丁寧	13	思う	13	お願い	22	冗談	17	優しい	18	優しい	13
売る	12	相手	12	頼む	22	嫌	15	直接	17	自分	10
人	11	出す	10	話す	22	直接	15	自分	14	制止	9
相手	11	お願い	9	素直	19	相手	12	要望	12	説明	9
理由	10	謝る	9	思う	17	遠回し	11	話	12	威圧	7
話す	10	顔	8	相手	16	行為	11	普通	10	嫌	7
媚びる	10	態度	8	直接	15	話	11	人	8	冗談	7
自分	9	自分	7	利益	11	人	9	高圧	7	人	7
申し訳	9	話	7	提示	8	素直	9	素直	7	相手	7
話	9	嫌	6	聞く	8	態度	9	相手	7	頼む	7
思う	8	—	—	理由	8	意見	7	話す	7	少し	6
直接	8	—	—	話題	8	正直	7	説明	6	注意	6
下手	7	—	—	メリット	7	頼む	7	聞く	6	話	6
行動	6	—	—	交換	7	話す	7	理由	6	話す	6
出る	6	—	—	さりげ	6	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	興味	6	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	条件	6	—	—	—	—	—	—

ーク分析を行った。その結果を Figure 3 および 4 に示す。

依頼的方略（Figure 3）では，主たる node として，「言う」「伝える」「話」がみられた。最も頻出度が高い「言う」と「伝える」および「話」は共起関係にあり，なおかつ，その他に「素直」「理由」「思う」「さりげ」「直接」も共起関係にあった。特徴的にみられる共起関係としては「交換—条件」が挙げられる。

拒否的方略（Figure 4）では，主たる node として，「伝える」「言う」がみられた。最も頻出度が高い「伝える」は「言う」「冗談」「素直」「理由」「相手」「思う」「自分」「行為」と共起関係にあった。特徴的にみられる共起関係としては「遠回し—言う」が挙げられる。

大学生による目下に対する操作

目下への操作について同様に，共起ネットワーク分析を行った。その結果を Figure 5 および 6 に示す。

依頼的方略（Figure 5）では，node として「伝える」「言う」がみられた。双方は共起関係にあり，最も頻出度が高い「伝える」と共起関係にあるのは「言う」以外に，「高圧」「思う」「自分」「優しい」「要望」「直接」がみられた。特徴的な共起関係として「高圧—伝える」「優しい—伝える」が挙げられる。

拒否的方略（Figure 6）では，主たる node として，「伝える」「言う」がみられた。双方は同程度の頻出度であり，双方と共に共起関係にある語には，「自分」「嫌」「思う」「直接」がみられた。特

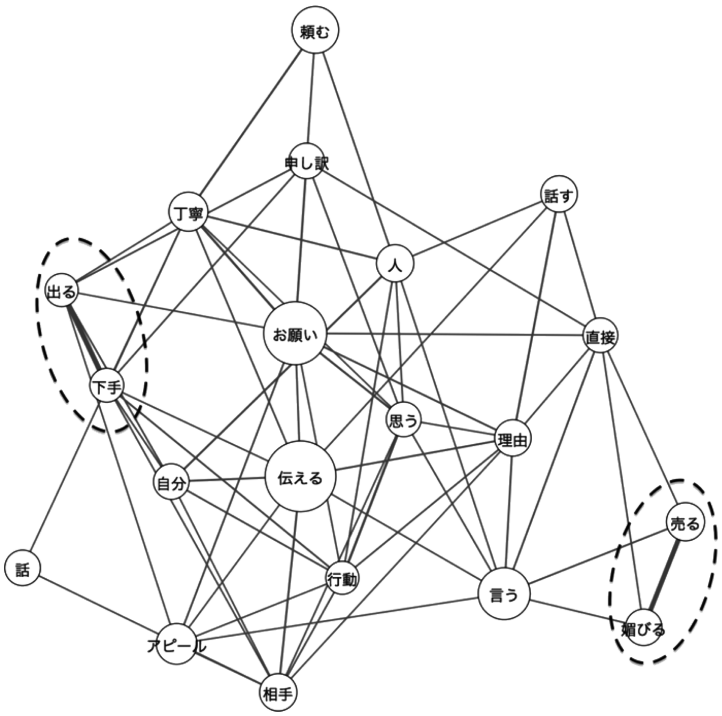

Figure 1.　目上を対象とした依頼的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

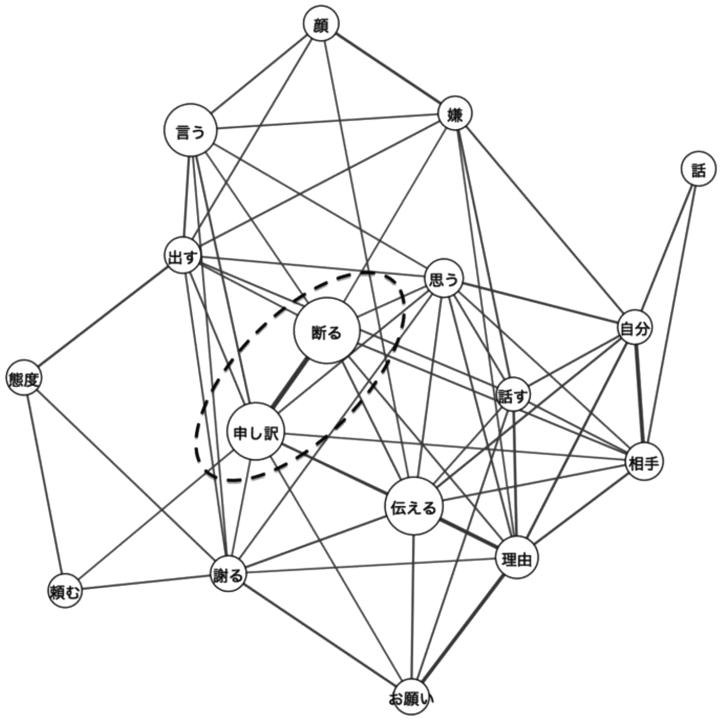

Figure 2.　目上を対象とした拒否的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

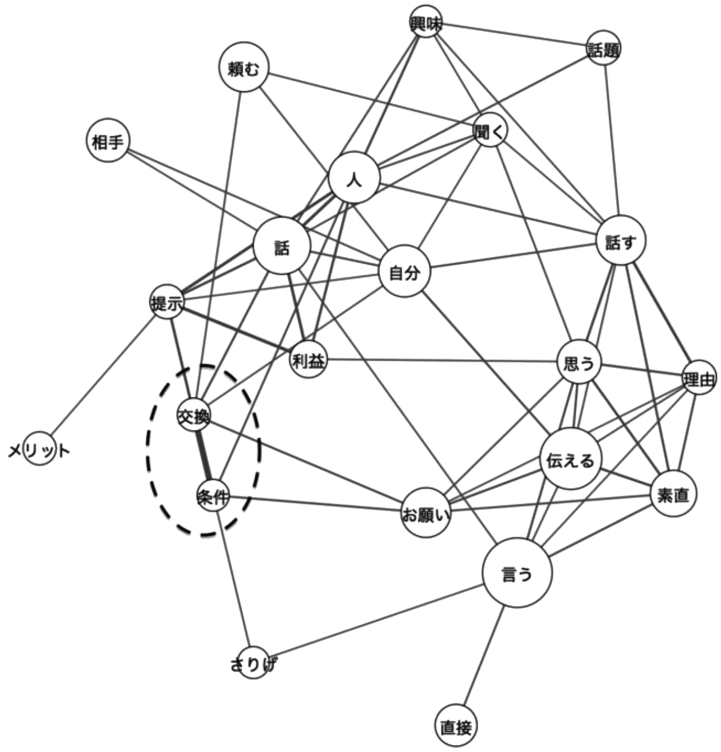

Figure 3.　同年輩を対象とした依頼的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

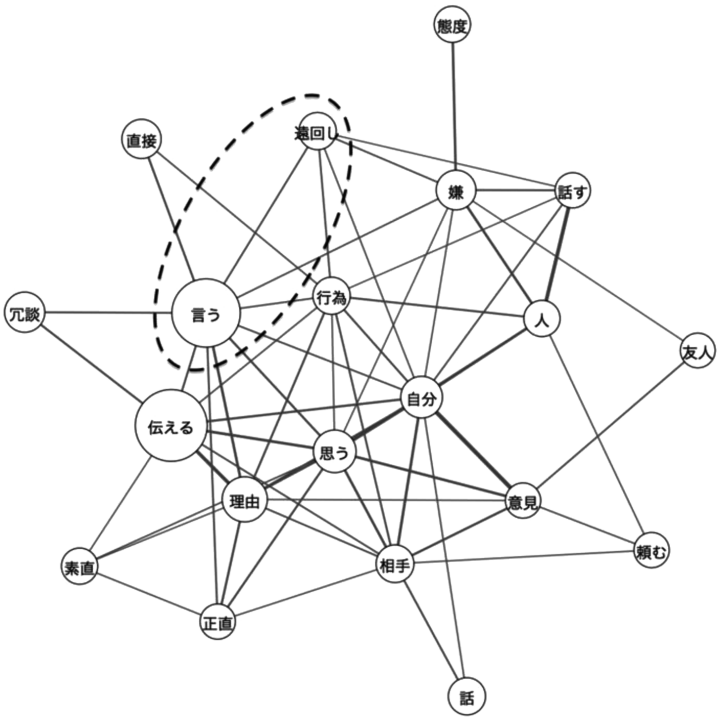

Figure 4.　同年輩を対象とした拒否的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

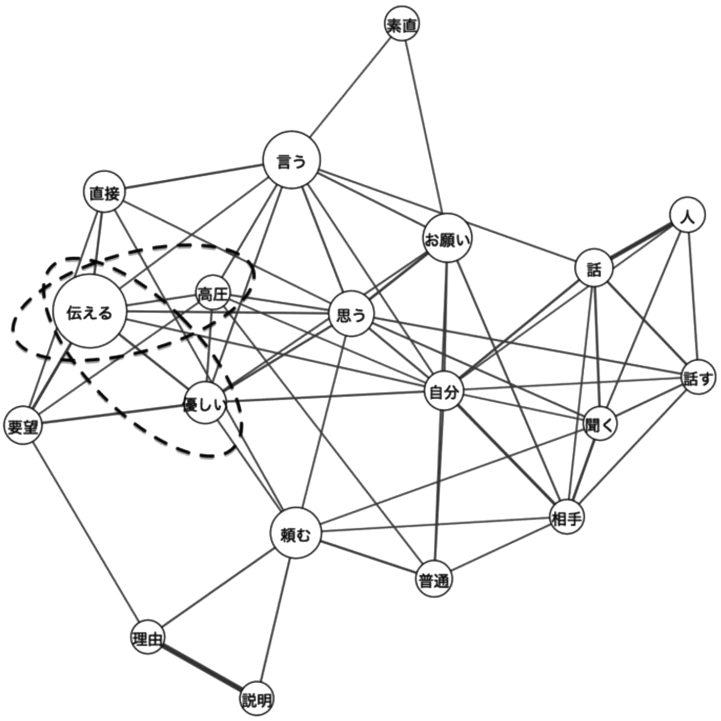

Figure 5.　目下を対象とした依頼的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

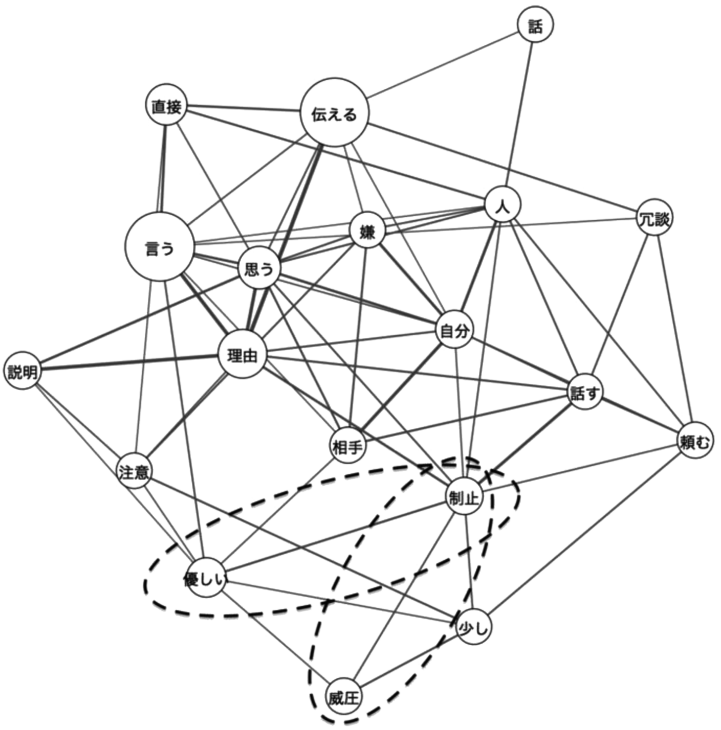

Figure 6.　目下を対象とした拒否的操作方略に用いられる語の共起ネットワーク

徴的にみられる共起関係として「優しい—制止」「威圧—制止」が挙げられる。

地位関係による比較

上述してきた6つの共起ネットワーク分析の結果を地位関係間で比較した。その結果，いずれの地位関係においても拒否的・依頼的な操作において「伝える」「言う」は高い頻出度のnodeとして検出された。

次に，依頼的操作に着目し地位関係間の結果を比較すると，目上に対しては「下手」「丁寧」など礼儀を弁えた語がみられるが（Figure 3），同年輩に対しては「素直」「さりげ」「直接」（Figure 2），目下に対しては「高圧」「優しい」「直接」（Figure 5）などの語がそれぞれの分析における高い頻出度のnodeと共起しており，地位関係によって用いる操作の内容が異なることが見受けられる。反対に拒否的操作に着目し地位関係間の結果を比較すると，目上と同年輩において「理由」が（Figure 2, 4），目上と目下において「嫌」が（Figure 2, 6）共通してそれぞれの分析における高い頻出度のnodeと共起していた。また，同年輩においては「冗談」「素直」も高い頻出度のnodeと共起していた。

さらに，地位関係と方略の組み合わせにおいて特徴的にみられる語の共起関係をFigure1～6において点線で囲んだ。目上に依頼的操作を行う場合は，「出る」と「下手」，「売る」と「媚びる」のそれぞれ共起関係（Figure 1），拒否的操作を行う場合は，「申し訳」と「断る」の共起関係（Figure 2）が特徴的であった。同年輩に依頼的操作を行う場合は，「交換」と「条件」の共起関係（Figure 3），拒否的操作を行う場合には，「遠回し」と「言う」の共起関係（Figure 4）が特徴的であった。目下に依頼的操作を行う場合には，「高圧」と「伝える」，「優しい」と「伝える」のそれぞれの共起関係（Figure 5），拒否的操作を行う場合は，「制止」と「威圧」，「制止」と「優しい」のそれぞれの共起関係（Figure 6）が特徴的であった。これらをもとに地位関係と方略の組み合わせによる特徴的な操作についてTable 2に示した。

考察

本研究では大学生を対象に日常生活でみられる他者操作を地位関係をも考慮し広く把握することを目的とした。自由記述回答への共起ネットワーク分析の結果からは，地位関係および操作の形式によって，共通する操作と，特定の地位関係および操作の形式によってのみみられる操作が明らかになった。

まず共通する操作として，頻出語に注目すると「伝える」「言う」という語が全ての地位関係および操作の形式において頻出していたが，これは自らの他者操作を説明する際に，両語が多用されるに過ぎず，操作の内容が共通していることを示す結果ではないだろう。それに対して，共起関係に注目すると「理由」と「伝える」が，目下に対する依頼的方略を除く全ての地位関係と操作形式において共起関係にあった。ただし，目下に対する依頼的方略においても「理由」は「説明」と共起関係にあるため，理由を説明し伝えるという操作は，どのような地位関係および操作の形式においても多用されるものと考えられる。

次に，地位関係と方略の組み合わせにおいて特徴的な操作としては，以下のものがみられた。目上に対しては，「下手に出て，媚を売る」依頼的操作，「申し訳なさそうに断る」拒否的操作がとられ，同年輩に対しては，「交換条件を出す」依頼的操作，「遠回しに言う」拒否的操作がとられ，目下に対しては，「高圧的もしくは優しく伝える」依頼的操作，「優しくまたは威圧的に制止する」拒否的操作がとられることが示唆された（Table 2）。また，共起関係ではないが，「素直」が同年輩の依頼的操作および拒否的操作，目下の依頼的操作のみに頻出し，「冗談」が同年輩と目

Table 2　地位関係と方略の組み合わせにおける特徴的な操作

	目上	同年輩	目下
依頼的	下手―出る 〈項目例〉 ていねいに下手に出て伝える。 媚びる―売る 〈項目例〉 媚びを売る，謝罪を入れながら言う。	交換―条件 〈項目例〉 ～してあげるから～してと交換条件を求める。 相手が利益になるような話と交換条件にする。	高圧―伝える 〈項目例〉 高圧的に要望を伝える。 優しい―伝える 〈項目例〉 優しく，分かりやすく伝える。 アドバイスするように伝える。
拒否的	申し訳―断る 〈項目例〉 申し訳ないという気持ちを出しつつ断る。 申し訳なさをかもしだしながらはっきり断る。	遠回し―言う 〈項目例〉 遠回しにやめなよと言う。 他人のことを取りあげて話し，遠まわしに言ってみる。	優しい―制止 〈項目例〉 優しく諭す。 優しい言い方で「しなくていいよ」と言う。 威圧―制止 〈項目例〉 目をみて威圧的に伝える。 口調を強くする，表情をけわしくする。

下のいずれも拒否的操作において頻出していることも特徴的な結果であるといえる。つまり，素直に何かを依頼したり拒否したりすることや，冗談を言って拒否するという操作は，目上には用いられないものと考えられる。

上述してきた各地位関係および操作の形式における特徴的な操作は，相手との地位関係によって，用いる操作を大学生が使い分けていることを示すものといえる。これは，先行研究（e.g., 寺島・小玉，2004）においては検討されてこなかったが，本研究において注目した操作対象者との地位関係が他者操作の理解に重要な要因であることを示唆するものである。また，「遠回しに言う」「素直」は適応的な操作であり，日常生活における他者操作は不適応的なもののみでない点において注目される。

加えて，本研究でみられた操作方略と先行研究（寺島・小玉，2004；Buss et al, 1987；Buss, 1992 ）で指摘されている操作方略および技法を比較すると，寺島・小玉（2004）による自己優越的行動操作，自己卑下的行動操作，自己優越的感情操作，自己卑下的感情操作のそれぞれに該当する操作は本研究の回答からもみられた（例：「自己優越的行動操作」と「高圧的に伝える」）。また，Buss et al（1987）の，愛想，強制，理由の説明，自己卑下，Buss（1992）の互恵的報酬，金銭的報酬，強弁な態度に該当する操作も本研究の回答にみられた（例：「愛想」と「媚びを売る」）。それに対して，先行研究にみられない操作として，拒否的操作における「遠回しに言う」，拒否的操作における「優しく制止する」，拒否的操作における「冗談の使用」がみられた。

本研究の課題として，本研究において分析に使用した共起ネットワーク分析は語句の頻度に基づく共起関係に注目しただけなので，操作の方略が実際には異なっていても，それを説明する語句が

同一であれば類似した結果が得られてしまうことが挙げられる。これについては，今後の研究において文脈情報に注目した分析も必要であろう。また，本研究の結果は，あくまで自由記述回答の分類を行ったものに過ぎず，得られた示唆が本研究の調査協力者以外でもあてはまるものであるのかについては，本研究の結果に基づく新しい操作尺度を作成し，それを用いた実証的な検証を行うことが必要であろう。

引用文献

Buss, D. M.（1992）Manipulation in close relationships: Five personality factors in interactional context. *Journal of Personality*, **60**, 477-499.

Buss, D. M., Gomes, M, H., Dolly, S., & Lauterbach, K.（1987）Tactics of manipulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1219-1229.

Christie, R., & Geis, F. L.（Eds.）（1970）*Studies in Machiavellianism*. Academic Press.

深田博己（2002）「説得心理学ハンドブック―説得コミュニケーション研究の最前線―」，北大路書房.

Goldberg, L.（1990）An alternative “Description of Personality” the big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1216-1229.

Gunderson J. G.（1984）*Borderline personality disorder*. American Psychiatric Press Inc., Washington DC.（J・G・ガンダーソン，松本雅彦，石坂好樹，金　吉晴（訳）（1988）「境界パーソナリティ障害―その臨床病理と治療―」，岩崎学術出版社）

樋口耕一（2014）「社会調査のための計量テキスト分析内容分析の継承と発展を目指して」，ナカニシヤ出版.

嘉瀬貴祥，坂内くらら，大石和男（2016）日本人成人のライフスキルを構成する行動および思考：計量テキスト分析による探索的検討，社会心理学研究，**32**（1），60-67.

川喜田二郎（1967）「発想法―創造性開発のために」，中公新書.

木川智美（2016）他者を操作することの心理学的研究の動向と展望，心理学評論，**59**(4)，387-396.

西田公昭（2001）オウム真理教の犯罪行動についての社会的心理学分析，社会心理学研究，**16**，170-183.

寺島　瞳，小玉正博（2004）他者操作方略尺度作成の試み，筑波大学心理学研究，**28**，89-95.

寺島　瞳，小玉正博（2006）他者操作方略に至るまでの過程の検討―認知傾向と精神的健康から―，筑波大学心理学研究，**32**，101-108.

寺島　瞳，小玉正博（2007a）他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討，パーソナリティ研究，**15**，313-322.

寺島　瞳，小玉正博（2007b）他者を操作する傾向と精神的健康・対人ストレスとの関連，日本心理学会第71回大会発表論文集，57.

寺島　瞳，小玉正博（2008）他者を操作する方略と心身の健康との関連，健康心理学研究，**21**，39-46.

寺島　瞳（2013）他者の利用と他者の操作，二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之（編集）「パーソナリティ心理学ハンドブック」，福村出版，427-432.

（きかわ さとみ　生活機構学専攻 2年）
（いまじょう しゅうぞう　生活機構学専攻 教授）

受理年月日　平成29年10月 2 日
審査終了日　平成29年11月29日